

それでも…おおむね良好

—寂しさを乗り越えて—

NPO 法人 教育支援グループ

Ed.ベンチャー



【みつけた！】 どうしてもすぐに子どもたちに見つかってしまいます。お別れ会以後、それぞれ進級した子どもたちのようすだけでなく、お母さんやお父さんも元気なのか心配で、ライオン学校の「家庭訪問」を思い立ち、2人という超少人数で、5月4日の夕方に万石浦入りしました。大学生支援隊の「伝書鳩通信」で、結構心配な様子も想像されたので、サポート拠点センターで打合せをしていると、暗くなりかけた窓に跳び上がって中を覗いている男の子の頭が二つ見えます。外から、「やっぱりそうだ、来てるっぺ！」「校長！校長！」と呼びかけてきます。外から転がり込んできた二人の笑顔は、懐かしそうにしながらも、ちょっとはにかんでいます。「よくわかったね？」と聞くと、通りかかったら、見覚えのある車があったから覗いてみたんだ、と教えてくれました。二人はこの春から4年生。だれと遊んでいたのか聞いてみると、ライオン学校の3年生の男の子の名前があがりました。私達は「エッ？」とって思わず顔を見合わせました。なぜなら、いままで何度も来ていても、いっしょに遊んでいるところを見たことがない組み合わせだからです。そういえば目の前の二人も、同級ではあっても気が合わないようすで、いつも距離をとっていることが多かったのに……？「〇〇もいたよ、妹も……」と女の子の名前もあげます。それを聞いて、とてもうれしい気持ちでいっぱいになりました。ライオン学校の子どもたちは、ライオン学校を通して友だちになり、学校が違って、学年が違っていても、いまでは地域でいっしょに遊べる「仲間」でいるのです。「ほら」といって首にぶら下げているものを見せてくれました。それは、夏に行った修学旅行で買った富士山型のライトです。ちょっと壊れてはいるものの、いまでも大事に身につけてくれているのです。「今夜は僕のうちでご飯食べればいいじゃん。いつもお母さんと二人きりだから寂しいんだ。でも、急だからお母さん困るかな…？」そんな言葉までかけてくれました。

次の日、サポートセンターは別のイベントが入っていて使えないので、朝は早めに「渡波第1仮設団地集会場」に移動。家庭訪問に出かけようとすると、3年生の男の子が飛び込んできました。また見つかってしまいました。「よくわかったね？」男の子はただただ笑うばかり。「いっしょに行こう。」手をつないで歩き出しました。一件目のお宅に向けて出発です。いよいよ家庭訪問の開始、子どもたちやお母さん・お父さんは元気でしょうか……。



【ケース1…学校に行けない】

ライオン学校の子どもたちの姉妹が不登校になっているお家が複数あります。2軒目に訪れた家庭では、中3のお姉ちゃんがあまり学校に行けていません。弟の4年生の男の子も、友だちとのトラブルから3年の後半は登校しぶりがあった、しばらくはお母さんが学校まで送っていくこともしばしばありました。その頃はライオン学校のお別れ会も近づいていた時期でしたので、私たちもずいぶんと心配したものでした。しかし、その後友だちとの関係も改善され、何とかがんばって登校できるようになったと聞いていました。しかし、中3になったお姉ちゃんの方はあまり変わっていないようで、お母さんはやっぱり心配がつきません。「もう3年だと思つて焦ってしまつて……。あまり学校に行けないほかのお子さんのお母さんとも話をするようになって、『心配していても始まらないから、ゆっくり子どもとつきあった方がいいよ』と言われるのだけど……。」ちょっぴりお母さんの目が潤んでいます。パートで働いているお仕事の方も、人間関係が難しく、いまはしば

らくお休みしようかと思っているとのこと。避難所から自宅に戻れたけれど、いろいろなことがうまくまわっていかない現実、疲れ切っているように見えました。8月に企画を検討している『伊豆合宿・親の部』に強くお誘いしました。「ここまでがんばってきたから、そろそろ疲れが出るころですよ。保護者で集まって、思いっきり愚痴を言い合ひましょうよ。」……そうお母さんに伝えながら、私たちがやらなければいけないもう一つのことが見えてきたような気がしました。

別のご家庭では、6年生の男の妹さんが不登校でした。ライオン学校の行事にはお父さんやお母さんと参加してくれるので、私たちとも顔なじみ。養護の先生がよく面倒見てくれるので、保健室登校が少しできるようになってきたとのこと。「まだこれからだけけど……」といいながらも、学校の対応に期待をかけていることがお母さんのようすから伝わってきました。

ところが、6年生のお兄ちゃんが話しながら「フウー」と大きなため息をつきます。

【ケース2…強い友だち、弱い立場の僕】

その大きなため息は、担任が替わったクラスのように聞いていたときでした。大人びた口調で、「何も変わりませんよ……威張るやつはやっぱり威張ってますから」。「いまでもいじめられたりしているの？」「ちょっかいはやっぱりかけてきますね。通りがかりに、僕が座っている机やイスを蹴っていくし、何か一言聞こえるように言っていくし。」「ほかの子どもたちは？」「その子たちの味方になるか、あとは距離をとっているかです。」「同じクラスのライオン学校の子は？」「一番威張っている子のパシリみたいになっているときもある。その子がいなくて僕たちも本当は仲がいいんですけど、普段はあまりそういうところお互いに出してません。」「何でほかの子たちは何も言わないのかなあ」「野球の仲間だったりするから、言えないんだと思います。」「お母さんが横から言葉を挟みました。「この子も毎朝ため息ついて、学校に行きたくないって言っているんですよ。でもまだ何とか行ってくれているんで、ほっとしてます。」

この地域では野球が盛んで、子どもたちが通う小学校には三つの少年野球のチームがあるそうです。そこに多くの子どもたちが入っていて、それぞれ厳しいしつけや練習を行っているらしいのです。そういえば、クラスの半分近くが入っていると聞いたけれど、ライオン学校の子どもの中で、現在野球チームに入っている子は誰もいません。昨年夏まで入っていた子がいたけど、その頃はその子もずいぶんと荒れていて、野球をやめてから徐々に落ち着きだしたことを思い出しました。「まだまだ大変だけど、がんばっているんだね！」。そんなことばをかけてあげることしか最後はできませんでした。

震災の後クラスが荒れ始めた、友だちが暴力的になった、と子どもたちが口をそろえて教えてくれたのが2月から3月のことでした。中には鉛筆で顔を突かれたり、蹴りを入れられたりと、放っておけないと思われることもいくつか耳にしました。そして4月の進級を迎え、学年によってはクラス替えがあったり、クラスが変わらない学年では担任の先生



が替わったようでした。出会った子どもたちや親から話を聞くと、それでも徐々に落ち着いていっている印象を受けました。そして、ライオン学校の子どもたち自身も大きく成長しているようです。しかし一部では、まだうまくいかない子どもたちもいて、子どもたちの周りにはアイテムー学校・家庭・スポーツ少年団ーなどでは解決がつかない場合もあるのかもしれませんが。大きなため息をつく6年生の子が言ったことばがいつまでも引っかかりました。「もうあきらめていますから。」

【ケース3…成長の痛み】

「帽子をかぶって行って、といくら言っても、このごろは言うことを聞いてくれません。どうも上級生の子に学校で帽子のことで何かを言われたようです。ちょっといじめられていたみたいで、それは学校の先生も入って解決してくれたようなのですが、それ以外にもあったようで、何があったかは話してくれないんです。」4年生の男の子のお母さんは、急に変わっていく我が子が気がかりでたまりません。「家でもほとんど勉強しなくなったし、習い事も遊ぶ時間がなくなるから行きたくないと言い出して……。」お母さんの心配は尽きません。「その上、このところ夢遊病のように夜起き出してきて、茶の間に来て何かを叫んだり、この前は玄関から出て行こうとしたりしたんです。慌てて止めた後はもう、すぐに寝てしまい、次の日には何にも覚えていないというのです。」被災→避難所→アパート生活と、環境がめまぐるしく変わり、今は狭いところでおじいちゃんやおばあちゃんもいっしょに住んでいる。そんな環境の変化を受け入れていくことは大変なことです。まして背が小さなこの子は、友だち関係の中で、対等に渡りあっていくのも結構苦労するのに違いありません。また、お母さんの話をよく聞いていると、小さいころ再婚したことをはっきり伝えてこなかったために、気持ちの中でうまく整理できていないこともあるようです。被災したときに病気になった小さな弟にお母さんがかかりっきりだった体験から、弟と自分をどうしても比較してしまうようになってもいるようでした。

子どもそれぞれにいろいろな事情があり、様々な事柄をそれぞれの子どもなりに同時に抱え、胸を痛めながら大きく成長しようとしているのです。たくさん痛みを感じながらも、成長していく「けなげな」子どもたちの姿が、今回の家庭訪問ではよく伝わってきました。

【だれに断ったの?!】家庭訪問するたびに子どもたちは増え続け、家庭訪問先でもみんなで上がり込むようすに、「これではまずい、お昼を食べさせて、すこし振り切らないとゆっくり家庭訪問ができない!!」。そこで本日の拠点としてお借りした集会場にお昼前に戻りました。もちろん子どもたちはみんなついてきて、初めて使う場所だけに興味津々で、おもちゃやゲームを出してきて遊びます。子どもたちが以前と変わったのは、オセロや将棋といったゲームで遊ぼうとするようになったことです。集中して考えながらゲームをする姿は「ちょっと大人」の雰囲気。

カップ麺を買いに行く子、お湯を沸かす子、と、なんとなくお昼ご飯に流れ始めた頃、入れ替わり立ち替わりで、何人かの大人の人が様子のをぞきにきました。はじめは私たちの活動の様子を見に来たのだとは思わなかったのですが、「あんたたち、誰に断ってここを使っているの?」と厳しい口調で聞かれたとき、少し事態が飲み込めませんでした。「拠点センターにいる役所の方から許可をいただいて、鍵も預かって使わせてもらっているんですけど……」。経過をしっかり理解してもらおうと説明をするのですが、耳を傾けてはくれません。「あんたたちは、会長さんに挨拶したのかね?ここを管理する責任者に許可をもらうのが当たり前じゃないのかね。」私たちは何がいけなかったのかよくわかりません。



使い方がいけなかったのか、それとも子どもたちの声がうるさくて迷惑をかけたのでしょうか。しかし、そのどちらでもないようです。「挨拶がなかった」というより、この集会場を自分たち以外の知らない人間（よそ者）が使っていることに我慢ができなかったようです。「ボランティアはいつもそんなやり方するのかね?私たちはみんなで外から見てたんだよ。」といわれてしまったときは、これ以上は無用な争いになるだけだと思い、集会場を片付け、買い物に行った子どもたちに会えることを願いながら外へ出ました。外には確かに何人かの人たちが、集会場を伺うようにベンチに座って、こちらを見ていました。

お昼を食べる場所を失った私たちが、近くの「万石浦仮設団地集会場」を紹介されていくと、今度は先ほどとは全く逆の対応。イベントをやりながらも、1室をわざわざ空けてくださり、お湯まで沸かしてくれました。これだけ地区での対応が違うことをどう整理していかかわりません。家庭訪問でその日の午後、先ほど出ざるを得なかった集会場のある仮設団地を何度も回りましたが、もう集会場の周りに人は誰もいませんでした。また、集会場が使われている様子もなく、先ほどの「会長さん」と呼ばれていた人にすれ違って頭を下げると、照れたような表情を返してくれました。

私たちが垣間見た閉鎖性が何を意味するのかは、これからも考えていかなければいけないものかもしれません。

とはいえ、子どもたちは元気で、その後はアパコ（「アパート横の公園」の意味のようだが、実際はアパートではなく県営住宅）に集まって鬼ごっこなどで遊んでいました。人も増えていきます。アイスクリームを奮発すると、中には遊具のてっぺんで食べている子どももいました。

遊んでいる子どもたちを尻目に、せっせと家庭訪問をこなすことができました。

今回の家庭訪問にあたって、各ご家庭に往復ハガキにて家庭訪問日時をお知らせして、訪問計画をたてました。お家の方からは通信欄にて、次のようはご返事をいただきましたので、ご紹介いたします。

- お忙しい中、家庭訪問に来て下さる事、ありがとうございます。☆☆も喜んでます。
- 先日、大学生の方々が来てくれてうれしかったです。そして、今回は校長先生、もう感激です。いつもありがとうございます。
- お会いできるのを心待ちにしています。5年生になって、委員会活動の一環で「1年生を迎える会」で開会のことばを言う役をしたそうです。「らいおん学校での司会」が役に立ったのだと思いました。先生方に会う前には考えられなかったことです。とても感謝しています。ありがとうございます。

【支援隊活動記録】

■万石浦子ども支援 ○5月4日(第23回)支援隊メンバー:柿本隆夫(下福田中学校)、清水睦美(東京理科大学)

■寄付(4月20日~5月9日)手塚文雄、権田和子

★★継続的な支援のために、寄付を募っております。ご協力をお願いします★★

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援 (Edベンチャーヒガシニホンダイシンサイシエン)

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和市中央林間3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp